

教授方法が英語学習に対する興味や動機づけに及ぼす影響についての縦断的研究

森 修

I 問題と目的

市川 (1995) の「学習動機の2要因モデル」は、内発・外発だけではとらえにくい他の動機を位置づけるために、理論からトップダウン的に学習動機をとらえるのではなく、自由記述によって広く収集した学習動機を整理し構造化するというアプローチをとっており、中学生の英語学習に対する動機づけを考える上でも、このモデルは有効であると考えられる。

Jacobovits (1970) はアメリカでの外国人の英語学習者を対象に調査を行い、英語の学習成績を左右する諸要因の中で動機づけが特に重要であることを見出した。外国語学習において動機づけが重要であるとすれば、日本の社会環境の場合は外国と異なり、日常生活の中に英語学習への動機づけを高める直接的な契機が少なく、教室内での意欲の喚起こそが英語学習持続への鍵となる。そこで教授法が生徒の意欲喚起のための重要な要因となってくる。

従来の英語教育における多くの欠陥を克服すべく、1970年代以降ヨーロッパを中心に考えられてきた教授法がコミュニカティブ・アプローチ (Communicative Approach: 以下 CA と略記) である。CA は授業が実際のコミュニケーションに近いものになることを目指しており、第1言語習得のプロセスに近づけた教授法である。

倉八ら (1992など) は、従来、中学校の英語教育で用いられてきた文法規則を中心に教える教授法をグラマティカル・アプローチ (Grammatical Approach: 以下 GA と略記) とし、GA と CA の両教授法の比較検討を行い、数々の知見を得ている。しかしながら、中学未就学児を対象にし、英語学習初期の短期間という限定されたものであった。中学校3年間で見ると、中学入学当初は会話中心の CA が教授法の中心になることが考えられ、3年生になれば受験を意識して、文法中心の GA が教授法の中心になることが考えられる。また、教師が GA か CA のどちらか一方のみで授業をしていることは考えにくく、両教授法を折衷的に用いているものとするのが妥当であろう。従って、それぞれの教授法がどのような動機づけを高めることになるのかを知ることは教育的に意義のあることと思われる。

そこで本研究では、中学生を対象にして、「学習動機の2要因モデル」をもとに英語学習に対する動機づけの

変化を学年ごとに検討することを第1の目的とする。また、生徒の認知による教授法尺度により、生徒を CA 群と GA 群に分類し、教授法の違いがそれぞれの学年において、生徒の動機づけにどのような影響を与えるのかを比較検討することを第2の目的とする。

II 方法

被験者は愛知県内の公立中学校3校の1年生10クラス344名、2年生11クラス404名、3年生10クラス338名の合計1086名であった。2001年5～6月(1学期)、同年10月～11月(2学期)の2度にわたって質問紙調査を英語の授業時間中に一斉に実施した。質問紙1の教授法尺度は、GA や CA に関わる活動を含んだ英語の授業における活動についての質問を29項目作成し、5件法で尋ねた。質問紙2の英語学習動機づけ尺度は、市川 (1995) の自由記述によって得られた学習動機の例を参考に25項目を作成し、5件法で尋ねた。

III 結果と考察

主成分分析(プロマックス回転)の結果、教授法尺度からは GA と CA の2因子、動機づけ尺度からは「学習動機の2要因モデル」とほぼ同様の6因子、すなわち、実用志向、訓練志向、関係志向、将来志向、自尊志向、充実志向が抽出された。1学期と2学期の両尺度が時間的に安定したものかどうかを確認するために、再検査信頼性について検討した。両尺度の項目間同士の相関係数を求めたところ、教授法尺度では $r = .36 \sim .54$ 、動機づけ尺度では $r = .38 \sim .60$ で、すべてに有意な正の相関があった。

そこで、学年と時期における動機づけの変化について検討を行った。その結果、学年の主効果が、実用志向、訓練志向、関係志向、充実志向で有意であり、関係志向では2、3年の方が高かったが、それ以外は1年生の方が高かった。また、時期の主効果が関係志向と充実志向で有意であり、訓練志向では有意傾向があった。関係志向では2学期の方が高かったが、それ以外は1学期の方が高かった。1年生では2学期になると総じて動機づけが低くなる傾向があるが、充実志向ではそれが顕著であった。入学当初は輝いていた生徒達の顔が、わずか半年足らずで曇ってしまうという中学1年生特有の現象が確認された。逆に、受験のため、みんながやっているから仕

方なくという気持ちが強くなっていくという図式が考えられる。また、2年生でもその傾向が強くなっていき、さらに他人に負けたくないという気持ちや、英語ができることによって優越感を得たいと思うようになっていいると考えられる。さらに、3年生では1学期には受験のためや他者につられて仕方なくという気持ちが強いが、2学期になるとその気持ちが薄らいでいき、自分でやらなければならないという気持ちが強くなっていくと思われる。

次に、GAとCAという2つの教授方法の違いがそれぞれの学年において、生徒の動機づけにどのように影響を与えるのかを検討した。その結果、1年生においては、すべての動機づけにおいてGAの主効果が有意であり、充実志向ではCAの主効果も有意であった。1年生においては口頭作業中心の時期が多く、CAを高く認知している生徒の方が動機づけが高まるのではないかと予想されたが、それに反する結果となった。その理由の1つとして考えられるのは、1年生は初期の段階では一様に動機づけが高く、文法中心、教科書中心のGAにおいても依然として高く動機づけられているからではないかということである。2年生では、GAの主効果が実用志向、関係志向、充実志向で有意であり、訓練志向でも有意傾向があった。また、CAの主効果が実用志向、将来志向で有意であり、自尊志向でも有意傾向があった。GAとCAを高く認知している生徒は実用志向が高まるという結果になり、CAを高く認知している生徒は、将来志向が高まり、自尊志向も高まる傾向があるという結果となった。また、GAを高く認知している生徒は充実志向が高まり、訓練志向も高まる傾向があるという結果になった。また、GAを低く認知している生徒は関係志向が高まるという結果になった。このように2年生においてCAの主効果が多く見られたということは、CAを高く認知させることが、英語を読めたり話せるようになりたいという気持ちや将来にわたって英語に関わっていききたいという気持ちを高めることができると考えられる。3年生ではGAの主効果が、関係志向で有意傾向であった以外はすべてに見られた。実用志向ではCAの主効果も有意であり、関係志向でも、有意傾向ではあるがCAの主効果が見られた。GAとCAを高く認知している生徒は実用志向が高まり、GAを高く認知している生徒は将来志向、訓練志向、自尊志向、充実志向が高まることになる。しかし、GA、CAのいずれも低く認知している生徒は関係志向が高まる傾向にある。これ

らの結果から、3年生は予想通り教科書中心、文法中心のGAに高く動機づけられているということが言えよう。やはり、受験を意識しているためにこのような結果になったのではないだろうか。また、英語を読めたり話せるようになりたいという動機を高めるにはGAだけでなくCAも必要であると言えることができる。

IV 総合考察と今後の課題

学年による動機づけについては、1年生において著しい変化が見られた。入門期の口頭作業中心の時期を終えて教科書に入り、三人称単数、現在の疑問文をならう頃には、分かる楽しみがなくなってきている生徒が少なくないということの表れであると考えられる。1年生や2年生では、学期が進むと他者につられて仕方なく学習している傾向が強くなるという事実を認識し、学習自体がおもしろいと思えるような工夫をすることによって動機づけを高めていく必要があるであろう。

教授法と動機づけの関係については、1年生ではCAに動機づけられているのではないかと思われたが、結果としてはGAにより動機づけられていることが分かった。2年生では、CAに動機づけられることが多いことが分かった。CAを高く認知させることが、英語を読めたり話せるようになりたいという気持ちや将来にわたって英語に関わっていききたいという気持ちを高めることができるということは教育的に重要な意味があると言える。3年生ではやはり受験の影響が大きいためか、GAにより動機づけられることが分かった。ただ、英語学習そのものに対して意欲を失っている生徒がいるということも認識し、両教授法を有効に使うことにより動機づけを高める工夫が必要とされるであろう。

本研究の問題点としては、まず、教授法尺度や英語学習動機づけ尺度の質問項目の検討があげられる。教授法尺度については、それぞれの活動について生徒が楽しいと思う度合いを尋ねており、教師が実際に行っている活動かどうかを判断する尺度としては検討の余地があるであろう。また、英語学習動機づけ尺度については先行研究と同じ6因子が抽出されたが、学習内容の重要性と賞罰の直接性という2軸にはっきりと分かれなかった。高校生と中学生という対象の違いが考えられるが、項目を中学生向きに若干修正し、削ったことによるものが大きいと考える。また、2要因分散分析であるが、分析を繰り返すことによって信憑性が低くなるという問題がある。今後は分析の仕方にも工夫をする必要があると考える。